

芥川龍之介論―私小説への傾斜
中原中也論―「在りし日」を追って
有島武郎の童話論

三好達治詩研究―三好達治の詩作上に底流する「思想」
常田みち子
辻 和江
鶴 飼 恵 子

渡 辺 均

坂口安吾
矢野奏鳴美

舟橋文学―感性の世界
萬 待 子

夏目漱石―前期文学の意義
吉田久美子

坂口安吾論
吉田 則 子

北村透谷小論―文学の自律性に向って
鮎 谷 厚 子

武田泰淳考
岩 田 裕 規

三島由紀夫論
尾 辻 誠

田宮虎彦―人と作品
辻 俊 広

高村光太郎の生涯―人と作品
八 木 秀

プロレタリア文学と亀井勝一郎
松 島 繁 行

萩原朔太郎論―「無用の人」朔太郎
佐 伯 信 子

中野重治論―その創作主体の回復
佐々木陸浩

△国語学▽

「宮古島方言」の言語地理学による一考察
池村美知子

雅俗折衷体の性格
野 口 幸 子

「あぐらをかく、その他の語」の言語地理学的考察

中世軍記物語の擬音語、擬容語
奥 里 恵
大 岩 信 久

編 集 後 記

第七号は全体として比較的若い世代の人たちの清新な論文集となつた。その内わけは、古代前期一篇、古代後期一篇、近現代三篇、近代文学研究資料一篇である。そのうち高良瞳さんのは、四十五年度の卒業論文を圧縮したものである。一号から続いてきた安永教授の「戦時下の文学」と題する論稿は、終つたのではなく、次号からまた引き続いて掲載の予定である。ご期待を乞う。

大学はどうあるべきか、文学研究はどうあるべきか、何のためか、どのような研究をすべきか、今日の歴史社会の条件が要請している問題意識を見究めつつ、ねばり強い追究の中で、創造活動のよき成果を期したい。

この機関誌がどのような歩みをつづけるかは、一に若い人びとの肩にかかっている。今後とも精進と協力を期待したい。(南波)

執筆者紹介

黒沢幸三

昭和四〇年度大学院
(修士課程)修了生
奈良大学専任講師・
本学嘱託講師

高良 瞳

昭和四五年度卒業生

玉井敬之

帝塚山学院短大助教
授・本学嘱託講師

深江 浩

北野高校教諭・本会
々員

水上 勲

昭和四四年度大学院
(修士課程)修了生
・伊丹市立高校教諭

堀部 功夫

昭和四四年度大学院
(修士課程)修了生

(表紙題字 土橋 寛)

投稿規定

国文学会機関誌「同志社国文学」は、会員諸氏の研究発表の場でありますから、進んでご投稿下さい。枚数は四百字詰三十枚〜四十枚。第八号締切は九月末日厳守。ただし掲載論文の数には限度がありますので、論文の採択は編集委員会に一任して下さい。

同志社国文学 第七号

昭和四十七年二月一日 印刷

昭和四十七年二月五日 発行

編集者 同志社大学国文学会

代表 土 橋 寛

京都市上京区烏丸今出川

発行所 同志社大学国文学会

振替 京都二七三七

京都市南区吉祥院池ノ内町一〇

印刷所 明文舎印刷株式会社